

1930 年前後日本における〈シャンハイ・イメージ〉

— 『犯罪科学』 および 『犯罪公論』 にみる事例研究¹ —

徐 青*

The Image of Shanghai in Japan around 1930:
Case Studies from *the Criminal Science* and *the Criminal Review*

Xu Qing

Abstract

The magazines *The Criminal Science* and *The Criminal Review* were a kind of mass media during the formative period of “the masses” in modern Japan. Based on the analysis of the magazines’ articles, this paper explores how these magazines represented Shanghai.

Primarily, during this time, the Japanese image of Shanghai, as it appeared in both magazines, was feminine, backward, criminal and an appropriate object to be enlightened. In other words, it was a typical Orientalist image. Further, the articles in both magazines promoted the perception shared by various contemporary classes in Japan that China (Sina) was an appropriate object for control/domination by Japan. In other words, around 1930, in particular after the first Shanghai Incident, the emergence of “the masses” and “modernism” rapidly created an environment for constructing the mass image of Shanghai.

The 1930s was the period when images previously maintained just in the heads of Japanese intellectuals began to be popularized, and which gave birth to the discourse of looking down on China (Sina) to support Japanese people’s self identificatio as Japanese.

はじめに

— 「大衆」メディアとしての『犯罪科学』と『犯罪公論』 —

「マス」*the masses / mass* の訳語としての「大衆」は、1923 年関東大地震後に登場した新語である。この「大衆」は政治的概念であると同時に出版などのメディアの発達とともに登場してきた新たな概念でもある。「大衆」の欲望が、前衛的機能もファシズム的機能もともに果たしうることになるからである。

本稿で取り上げる『犯罪科学』、『犯罪公論』

の基本データや編輯後記の検証などの検証を通じて、そうした雑誌の編集者が読者層としての「大衆」をイメージしていたことは明らかとされるであろう。

『犯罪科学』は総頁各号 340 頁程度、1930 年 6 月に創刊され 1932 年 12 月廃刊した月刊雑誌である。毎月一回発行で定価六十銭（郵税二銭五厘、但し 1930 年 1 月から四銭に増額。本体は 1932 年 6 月以後普通號定価五十銭に値下げ。）であった。定価を下げた號の「編輯後記」には、「前號をもってひとまづ公約の二ヶ年を完了した本誌は、讀者諸君の熱望と支持の中に舊衣をかなぐりすて、更新への第

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程後期課程

一步を力強く踏み出した。/大衆の生活から遊離した一切のものは無力である。今後本誌はつねに大衆とともにあるだらう。大衆化の更新六月號は見らるゝ通りすっかり面白を一新したつもりである。定價も斷然五十錢に値下げするとともに思ひ切った増頁を敢行した」とある(『犯罪科学』1932年6月)〔下線強調引用者〕。

『犯罪公論』は総頁各号260頁程度、1931年6月に創刊され1933年に廃刊した月刊雑誌である。毎月一回発行で定価五拾錢(郵税二錢)であった。同時期の本や他の雑誌の価格は、例えば夏目漱石の『坊ちゃん』十五錢(郵税2錢)、『三四郎』二十錢(郵税4錢)、大宅壯一編輯雑誌『人物評論』一冊につき三十錢、『文藝春秋』二十五錢であった。相対的に両誌の定価はやや高いといえるが、当時は「雑誌博讀會」²のような形式が幅広く存在していたことも考慮されるべきであろう。

それはどのような人々が『犯罪科学』、『犯罪公論』を読んでいたのかという問題とも関連してくる。両誌の読者層を端的に明示するデータはないが、たとえば、『キング』の購読状況に関する調査結果の中にある1931(昭和6)年の姫路高校生徒の愛読雑誌調査において調査人数152名中3名が『犯罪科学』を挙げている(永嶺1997: 207)。したがって、永嶺が調査に活用した各種の読者調査統計を丹念に辿れば、一定の読者像をより明確に描くことが可能であるかもしれないが、現段階では明確な像を結ぶことはない。

つまり、この二誌が「大衆」にどの程度の影響をもっていたのかについては定かではない。だが、この二誌に執筆している作家の多くが、「東京相互書園の貸出上位図書リスト」³(永嶺2001: 233-236)の著者たちでも

あった。これを考慮すれば、その影響力は決して過小評価されるべきものではない。

両誌が扱う論説、読み物の関心領域は、翻訳ものも含めて世界各地への広がりを見せている。創刊号の目次には、「臺灣の犯罪」「チェザレー・ロムブローゾの犯罪人類學」「江戸時代の犯罪」「希臘の遊女」「朝鮮の奇刑」「獨逸犯罪風景」「支那人の明るい犯罪觀」「賭博公營のモナコ」「實話妖僧ラスプーチン」などといったタイトルが並び、「世界に共有されている何か」(『犯罪公論』1931年10月)を明らかにするという傾向がはっきりしている(徐2005: 46-49)。それは『犯罪科学』購読を勧める創刊号の広告に、次のように謳われていたことにもよく表現されている(『犯罪科学』1930年6月)。

學術と獵奇趣味の握手成る！ 僅か二カ年だ。完全に確保せよ！ 生白い戀愛小説の時代は去った。歐米讀書界は既に機械科學から精神科學の追求へ大旋回を開始した。『犯罪科學研究』は今や獨米の讀書界を席捲しつつある。……人類發達史と社會文明史の脊梁に巢喰うエロチシズムとグロテシズムの探究！

そは正しく赤裸々にした人間の探究である。されば一切の社會惡と社會善を生む人間本能の秘奥を曝露し、人生科學の諸相を究めるのが本誌の使命である。……

両誌は読者の参加を求め「人生科學の諸相」をより一般化しようとしていることが、さらに興味深い。創刊号「編集後記」では、「犯罪科學では毎月『實話』『地方特異風習』に対する原稿を募集することにした。一般讀者からもどしどし投稿して欲しいものである」(『犯罪科学』1930年6月)と呼びかけている。

本稿では、モダン都市の「闇」の部分を探

究しながら 1930 年を前後する時期に期間限定で発行されたこの『犯罪科学』、またそれと似た傾向をもつ『犯罪公論』を中心に、活字メディア上の「シャンハイ」に関する言説を検証し、そこに表象された近代日本の「シャンハイ・イメージ」にはいったいどのような特徴があるのかを分析していく。

I. イメージとしての「上海された男」

「シャンハイ・イメージ」を探るには、まず、英語の *Shanghai* が動詞であることを確認しておかなければならない。雑誌『モダン日本』に連載された松井翠聲の「上海案内」には、「*Shanghai* といふ字は誘惑、胡麻化しといふ意です」とある。『ランダムハウス英和大辞典』にも、①「(暴力・麻薬・酒などを用いての)無法な手段で船に連れ込んで水夫にする」、②「暴力(脅迫・ペてんなど)によって徴発する」とはっきり書かれている。

この英語表現がもたらすイメージは、その後の近代日本における「シャンハイ・イメージ」に反復されることになった。こうした動詞的用語法を日本語的表現に置き換えれば、「*Shanghai* (上海) する」ということになるであろう⁴。

夭折の探偵小説家、谷譲次⁵は 1925 (大正 14) 年 4 月、雑誌『新青年』に「上海された男」という短篇を発表した。その物語自体は「上海」と直接関係はないのだが、「上海された」という表現は「殺された」、「殴られる」などと同じ意味で使われている。

なぜモダンな国際都市「上海」は、暴力・麻薬という「語彙」に繋がったのであろうか。川村湊は「「シャンハイ」された都市——五つ

の「上海」物語」で次のように述べている(川村 1988: 254)。

……少し考えれば、上海という街こそ、いわゆる外国勢力に「上海された」都市であるといえることができるのではないだろうか。強い酒やアヘンによって、生体をなくさせた中国人から無理矢理に奪い取った土地。「犬と中国人入るべからず」という制札が立てられていたというパブリックガーデン(黄浦公園)。イギリス、フランス、アメリカ、日本の外国人たちに租界として分割され、植民地都市として支配された街。それは意識のないままに拐かされ、それぞれの「租界」という名の檻によって囲いこまれた土地、街なのであって、中国という国の中から、上海という土地そのものが列強国によって、強制的に取り上げられ、拉致され、そうした宗主国人たちのための苦役に就かされていたという意味では、まさに「上海」された街だったのではないか。

1920 年代の短編小説が使用する「シャンハイ・イメージ」の川村のこの解析は、それまで日本でよく知られていたことへの一つの「確認」に過ぎない。つまり、この種のイメージは、すでにその半世紀近く前から日本人の言説の中には繰り返されてきたのである。

たとえば、このイメージは、福澤諭吉が 1860 年代に見て『西航記』や『唐人往来』に記した上海にも符合する。そして、それに前後して渋沢栄一が『航西日記』に「欧人の土人を使役する牛馬を駆逐するに異ならず。督呵するに棍を以てす。我曹市中を遊歩するに土人蟻集して往来を塞ぐ。各雜言して喧しきを英仏の取締の兵来りて追払えば潮の如く去り、すこしく休めば忽ち集まる。その陋体厭うべし」と記した上海の光景とも、実によく重なっている。そこで渋沢は、イギリスの植

民地経営の巧みさに感心して、それが「華学」を刻苦研究し、中国の「治体風俗より歴代の沿革、政典、律令は勿論、日用文学まで精究し、其の書を訳し、その説を著し、大事業を遂げる其人乏しからず」、「文明の素ある、人心の精神ある、学術の上に従事すること、乃国（イギリス）の強盛にして人智の英霊周密なる所以を徴するに足れり」としている（小島 2002: 108-111）。

つまり、「シャンハイされる」とは、すなわちそれがオリエンタリズムの対象となるということなのだ。この帝国主義の現実を、福澤や渋沢はより正しく認識していた。

II. 「シャンハイされる」上海とその変化の徴候

帝国主義間の国際政治において日本が「シャンハイされる」危機は常に存在した。「尊大自恣」な対応によって半植民地化された19世紀半ばの清（中国、支那）をめぐる日本人のイメージは、眼前の典型的な「反面教師」に他ならなかった。

半世紀以上を経て、清（中国、支那）のイメージは次第に「シャンハイする対象」として形成されるようになっていく。もっとも、この「シャンハイされる」危機感も持ち続けていた日本が、「シャンハイする対象」としての上海に、どのように具体的に直面するのか。

一般によく言われるように清（中国、支那）周辺部の支配権をめぐる日清戦争がその一つの画期を形成したのは事実であるが、中国中心部への具体的な侵略が本格的に開始される時期にも当然著しい質的な変化があったはずである。

日本やシャンハイをめぐる変化には、世界

資本主義の変化など全体環境を含めて相関関係がある。にもかかわらず、その複雑な心理的交錯を、多くのシャンハイについての日本の著述者たちは、「上海が変わった」という具合に一方的に言表している。「上海が変わった」のか、それと直面する近代日本人の主体的性格そのものが変わったのか、実際は曖昧であるといえよう。

たとえば、1918年以来8年ぶりの1926年1月、上海に約1ヶ月滞在した谷崎潤一郎は、「上海と云ふところは、一面に於いて非常にハイカラに發達してゐるが、他の一面では東京よりもずっと田舎だと云ふ感じを與へる。……一方支那人の風俗なぞも、悪く西洋かぶれがして、八年前に來た時とは大分違つた印象を受けた。氣に入つたらば上海へ一戸を構へてもいいくらゐに思つてゐた私は、大いに失望して歸つた。西洋を知るには矢張り西洋に行かなければ駄目、支那を知るには北京へ行かなければ駄目である」（谷崎 1926a: 558-559）、としている⁶。この場合、谷崎は「変化」の重要な要因を上海が日本以上に「西洋かぶれ」となったことに見ているのであるが、それは一種のグローバリゼーションの深化がもたらしたものであった。

そのような変化の兆候は、1932（昭和7）年1月28日の第一次上海事変直前の1931（昭和6）年10月に『犯罪科学』が組んだ「上海研究號」の内容にもよく現れている。これ以降の日本のメディアに、「言論統制」の強化とともに極端な「支配の論理」が突出していくこととこれを照合すると⁷、この過渡期の言説は実に興味深い研究対象である。

その「上海研究號」掲載の新居格⁸「上海の散瞥」には次のように記されている（新居 1931: 154-160）。

……二年の間に上海は非常に変わったであらうと想像される。……そんな場所を歩いていると全く上海に来ているように思われない。人々は上海の躁狂面に就いて考えてい過ぎる、上海と云えば犯罪的都市として市俄古とすぐ対照させて考えたがる。無論犯罪的でも罪悪的でもあらう。だが静安寺路の外人墓地や極司非而公園を散歩して味う上海の静かな部面の捨て難いものであることを考えてもいいのではないか。わたしが若し上海に住むものと仮定したらばどんな工合に生活するか。わたしの触目した範囲ですら、わたしは威海衛街かフランス租界の長浜路あたりに住宅を構け、夜の上海（これこそ上海らしい上海でもあらうか）を避けて、南京路のケリー・ウオルシュ書店から新刊書を読みつゝ勉強するかも知れない。……アメリカ映画によくチャイナ・タウンを取材することがある。陰謀と不気味さと、妖気とがある。先入観念の所為でもあらうか、上海は前述したやうに市俄古に對照される罪惡の都會になつてゐる、革命の策源地、密輸入、賭博、淫賣の巢窟のやうになつてゐる。少なくとも思はれてゐる。……それと共に支那人は暗殺が上手だとされてゐる、悪魔よりもスマートな暗殺團さえあると云ふ。ある國の共產黨員はその機關紙に本國から原稿を直接でなく、米國經由で送ると云ふ話もある。フランス租界に住む支那の某高官が暗殺された話を秋雨の夜のフランス租界の某邸宅で聴いて探偵小説を読むやうな氣がした。……わたしが何よりも好きな點は上海が世界中で最もチピカルな國際都市ではないかと云ふことである。二十數箇の國籍が織りなす人種のカクテルのそれである。……いろんな點から、面白い、研究に値する國際都市の一型體と私は考へてゐる。〔下線強調引用者〕

こうした言説に特徴的であるのは、上海が「異国」であるという感覺の希薄さである。もはやそこは外国ではない。新居が、「シカゴ

に住む」という「仮定」で思考することはおそらくないのだが、「陰謀と不気味さと、妖気と」のある「罪惡の都會」で「探偵小説」のような現実に蠢く「チピカルな國際都市」シャンハイに「住む」ことを考えることは可能なのである。そうでなければ、「面白い」「研究に値する國際都市の一形態」としてシャンハイは存在しない。問題は、なぜそのような思考が成り立つのかということである。

そこに E. サイドのいうオリエンタリズムが機能していることは明らかである。オリエンタリズム言説は、支配されるべき研究対象に「力」で向かうマッチョな言説であり、その支配の対象を女性化する言説であり、対象となる都市空間を、女性的なもの、あやしいもの、無力なものなどに再配置してしまう。周知のように、「シャンハイされた日本」が、欧米人によって「富士山、芸者、歌麿」にステレオタイプ化されて認識されるのは、その典型的パタンの一つである。

この文脈において、同じ『犯罪科学』『上海研究號』に掲載された、次のような無署名コラムのもつ意味は大きい（無署名 1931: 160）。この種の言説が簡単に流通するほど、シャンハイは日本の支配の対象と成り変わりつつあった。

……上海は女の街である。上海に遊ぶほどの人で、女にふれないでかへつた人は絶無である。上海に行く目的からして、誰しもがまず第一に女を目ざしてゆく。上海から女の興味がなくなったなら上海の繁榮は半減するであらうとまあ云つたところで、それほどでもないだらうが、とにかく女の匂ひは上海を上海らしくしてゐる一つの大きな特色でなければならぬ……（「すべては藝術のために！」）

「支配」に抵抗する勢力の存在についての関心の高さにも着目すべきであろう。新居の一文にある「米国経由」で機関誌の原稿を送るといふ「共産黨員」の話は、米国共産党のネットワークで動いていたとされる日本共産党のことを示唆し、興味深い記述である⁹。同じ『犯罪科学』『上海研究號』にある、支那通で知られていた後藤朝太郎の「逆光線に輝く上海の魔巷」にも次のような記述がある（後藤 1931: 169）。

……日本の共産黨分子とか又はそれに系統を引けるものとかで上海で策動してゐるものが多いことは世人も知れる如くであるが上海はその地の利を得てゐるばかりでなくさう云つた陰謀策源地としても最も有利にして他から關渉を受ゝることの少ない天地であると云へる。従つてグロの天地として自分をいくらでもばかして策動することのできるどころであるから支那の名流にしてその中原を避け徐ろに上海へ退いて捲土重来の畫策でも立てようと云ふものが多い。上海の地はかうした處から國際犯人の身柄を多分に含有し又之を現に培養しつゝあるものが多いのも當然の歸結である。今ではこれがこの上海の名物にまでもなつてゐると見られてゐる。……

1921年7月中国共産党は上海フランス租界内で結成された。極東におけるコミンテルンやソ連共産党などの活動は、國際情勢を反映してかなり複雑なものであった¹⁰。加藤哲郎によれば、「コミンテルンは、一方で各国支部＝各国共産党がそれぞれの国で革命運動・労働運動を展開しながら、他方で「労働者の祖国」ソ連邦を防衛し拡大するネットワークを作った。第一の運動の最重要の顔であるドイツ共産党が1933年ヒトラー政権樹立で地下に追いやられ、「世界革命」の望みが最終的に

絶たれると、コミンテルンの基本的活動は、ソ連の外交政策に従属した防衛的情報戦となった。そこで浮上したのが、第一の革命運動ではとるにたらない党でありながら、第二の情報戦・諜報戦では世界各地の活動にさまざまな人材を供給しうる米国共産党だった。ブラウダー書記長指導下の1930年代米国共産党は、そうした二重組織としてソ連共産党＝コミンテルンから位置づけられ、世界各地での工作担当者を輩出した¹¹。

その結果、「グロの天地として自分をいくらでもばかして策動することのできる」シャンハイで活動していたアメリカ共産党系の工作者はとても多く、ゾルゲ事件で有名なりヒャルト・ゾルゲがシャンハイに渡り、アメリカのジャーナリスト、アグネス・スメドレーを介して尾崎秀実と会ったのもまさに1930年代の「陰謀策源地」シャンハイであった¹²。

「東亜の大都市で上海の町ぐらい朗かで活気があり、同時に奥底の知れぬ薄気味の悪い町と云うのはあるまい」、「上海特別市の背景をなせる民国自身で構成している幾多の純シナ都市に於いても又同じように身の毛を慄たしめる問題が毎日のように勃発している」と、支那通として「権威的」に発言する機会の多かった後藤朝太郎は、上述の一文において当時のシャンハイを概観し、次のように続けている（後藤 1931: 162-185）。

……一體にこの上海の魔巷では大觀して見ると云ふと、先づ一、大金を所持してあるく者は危し。二、自動車で動いてゐるものは危し。三、付けねらはれてゐる注意人物は危し。四、犯罪行爲を匿し又は曖昧にしてゐるものは危し。と云ふことが云へる。何はともあれ、恐

ろしひ危険な雰圍氣に充ちた上海である。……阿片は上海の競馬と共に上海情緒の呼び物の大きい目標となつてゐる。之を單なる形式的の法律とか拒毒會の規定とか云ふものだけから見る見方を推しひろげ今少しくグロの天地に向かつて觀察を恣にするときは無限の犯行資料が得られるのである。これは單なる罪惡視すると云つた形式論からでなく支那民族の本質論から考察してその生命としての根本資料ともなすべきものである。國際聯盟あたりでは民國と阿片の關係を云々して來て人道問題から八釜しく云ひ立ててゐたりしてゐるが阿片は今少しく支那民族の根本問題に立入つて民族的に見るの必要があると考へるのである。……今後阿片問題をどう取り扱ふ可きかは最も重大な問題である。上海の魔巷の裏をしるものはよろしくそこまで眼光を進めて今後の民族研究の中心問題に触れる處まで進むべきであらうと信ずるのである。……經濟的には上海は世界の幹線、極東の衝に当たつてゐるところである。がしかしその裏面の精神方面を見て來ると殆んど云ふに忍びざるものが多々あり黄金の都會と云ふ方面からは之を仰ぎ見るの理を認めしめらるもその心の平和人生極致の偉大なる方面から之を見て來るときは必ずしも羨むべきものでないことを痛感するに至る次第である。……上海には深刻この上もない大陸情緒を感ずることが多分にある。……上海人口二百八十萬の國際都市ではあるが、しかし大陸情緒の趣きの表現されてゐる處から見ると正に支那全體の縮圖された處のやうにも見られる。と云ふのはいくら外人がたくさん這入り込んでゐるとは云つても全體の人口から云ふと百分の二三に過ぎず總體は支那自身の最も尖鋭化せられた又最も深刻味をたつぷりとあらゆる方面に現はしてゐる町として見らるゝのである。……大陸の情緒の主要なものはいくら魔の上海と云つたつて尚他の多く地方と同じやうにその争はれぬ大きい悟つた気持ちの含まれてゐると云ふことである。と云ふのは、その一、自己を

守るにどこまでも執拗であり忠實でありその根氣のよい事に於いては天下一品である。その二、要領眼日本位であつて實質を尊ぶところが又徹底してゐる。その三、歡樂和平氣分に於いて支那は徹底した又練れた處がある。その四、支那の人々には又大陸獨特の不關涉無關心主義をどこまでも持してゐるところがあり、自分に關する事を人の爲めに氣兼ねをしたり、又人の事を自分で氣に病んで見たりなどすることはない。その五、支那の人には又残酷味が強く何事によらず徹底した處まで行く。その六、犯罪行爲の徹底味を有すること。……〔下線強調引用者〕

「シャンハイされる」ことを「民族的」な「本質」に見出されるべきであると強調することの後藤のような言説は、オリエンタリズムの典型的な現れである¹³。「必ずしも羨むべきものでないことを痛感する」というように、そこにはかつて存在していた対象のもつ何らかの優位性を否定していく要因が含まれている。マイナス指標としての「他者」を作為していくことによって、近代的アイデンティティとしての「自己」を確立しようとするという意味でも、近代日本には「遅れた、脱すべき支那」が必要であつたのである。

先述した谷崎が、「西洋を知るには矢張り西洋に行かなければ駄目、支那を知るには北京に行かなければ駄目である」といったように、もはやシャンハイはそれまでのように「仰ぎ見る」対象としての側面をもつものではなくなった。

さらにより重要なことは、この時期の「シャンハイ」が觀念上はすでに日本に組み込まれてしまつてゐるということである。『犯罪科学』の同じ「上海研究號」には、「長崎県上海」を唱える永見徳太郎¹⁴の次のような一

文も掲載されている(永見 1931: 260-271)。

……露スキーだの、革命家の潜伏場所となつたり、中華民国のモダンが、ハイカラなランデブーであつたりする事程左様な情景も全く前世よりの因果に違ひない。……上海は、自由港である。パスポートの不用不用な土地柄、だから、長崎ムスメが平気な顔をして入りこむには、あつらへ向き、石炭の中にもぐりこんで苦しまなくつても、ビール樽で窒息の心配もなく行ける。……彼我の間に風雲をはらんだ結果日清戦争が起こつた。小國と侮つた日の本の勝利。是からといふもの、日本人の目ざましい活動舞臺は、支那だゝと。なかでも、美しい組の長崎ムスメが黄いろい聲を張りあげ『内地ちやツまらん、上海へ渡つて一かせぎせにや』『妾も賛成。異人のラシャメンになつて、ウーンと金は、取ってくる』……何しても上海は、萬國人種展覽會場だ。……上海に住んでると、知らずゝ自然と長崎式の間人になつてしまうことが面白い。いくら江戸っ子だ、大阪人だつせと意張つても、上海の雰囲気にかゝつたら、駄目だ。十年位住んでると長崎言葉と支那言葉が上達するばかりさ。……長崎島上海。それは全く吾々に取つては、痛快なお國違いだが面白い土地だ。

永見徳太郎自身は、芥川龍之介や竹久夢二ら時代を代表する文人、画人を長崎に招き、「長崎大正ルネサンス」を築きあげた人物であり、「ひたすらに長崎を愛し、長崎に生きた風流人」である。長崎が日本からシャンハイへの一般的な移動ルートであったことを考えると、こうした心理が働いたとしても無理はない。同時に長崎というキーワードが日本をシャンハイへ延長していく基点であることに違ひはない。

谷崎は、先述した「上海見聞録」で、「東洋第一、否世界中での有数な旅館と云はれる

『マチ` エステイック・ホテル』と云ふのへ、話の種に二三日泊つて見たが、宿泊料は一日最低が二十五弗、最高が七十五弗で、設備萬端贅澤を極めてゐるに拘はず、ボルド酒は千九百二十二年のシャトオ・ラフィットが最上と云ふところ、長崎のジャパン・ホテルにだつて千九百十一年のブルガンディー酒があるくらゐだのに、此れではちよつと貧弱である。料理も決して旨いとは云へない」(谷崎 1926a: 559)と記している。この「にだつて」という表現に見られるように、比較の基点を定める機能が長崎にはある¹⁵。

Ⅲ. 「シャンハイを滑走する」日本人

「上海にいてなによりも自由な感じをたっぷりもてるのが好きだった」(新居 1931: 160)、というイメージは、シャンハイを訪れた日本人の多くが共有した感覚であった。同時に、上述のように「シャンハイする」という言葉に共示されるイメージには、『犯罪科学』や『犯罪公論』がよく取り上げる「獵奇趣味」にも広がる要素がある。これをどのように理解していくのかという問題も、シャンハイ・イメージを大きく左右する問題である。

まだ 20 代半ばであった雅川滉¹⁶は、シャンハイ・イメージにともなう「獵奇趣味」の問題を、「上海研究號」の「上海を滑走する」という一文の中で次のように喝破している(雅川 1931: 272)。

……獵奇趣味という言葉がある。お洒落な紳士に、氣のきいた都會人に、この言葉はちよつと媚態を装うてみる。知り尽くした手前には奇をあさる何物もある筈がないとすれば、

この言葉は飽くまで窺き見から一步も前に出ない。また、出てはならぬ、出たら内幕が判つてしまふ。判つたらもう獵奇とはならぬ。……上海は獵奇の都である。——こんなことは嘘つばちだ。上海は東洋に於ける貿易取引の盛大な商業都市。それが全部である。それ以外に何もない。ある筈もない。例へば黄浦難路に佇んで、そこに櫛立してゐる各國銀行會社の壯大な建物を仰いで見結へ。金融資本のめまぐるしい廻轉とその壓力。それらのために、壓迫せられ、虐殺されかゝつてゐる多数の傷ましい人間獣の、最後の叫喚が、感じ得られるとしても、どこを押せば獵奇などという洒落くさい言葉が見出せるのか。〔下線強調引用者〕

こうした外国金融資本の中国支配と租界の贅沢な風習が田舎に及んでそこを荒廃させ、農業を衰退させているという現実への視線は、ごく一般的なものであった。谷崎のような文学者ですら、ごく当たり前のようににそれを欧米資本への批判へと展開できた¹⁷。

雅川はさらに続ける（雅川 1931 : 272）。

……たゞ、上海を獵奇の都と見る眼、——この眼がさう思つてみるから、上海は全く獵奇の都になつてしまふのだ。街頭を歩いてゐるけばゝしい女を淫賣婦だと思つてみれば、どの女もさうとしか思へないと一般である。『僕等の儒教精神は、儒教の生れた國の上で僕等の一族を不幸に陥入れてゐる』。この不幸を排日にもつて行くこともできる。……または金の上に起因させてもいゝ。恐らくは全てが關聯してゐよう。だが同時に女に持てぬという直接の事實が、それ等の原因を逆に結果として持つようになつて行くことも認めねばならない。〔下線強調引用者〕

ここにいう「排日」は横光利一が取材した

1925 年のいわゆる「5・30 事件」を想起させるが、実際中国における「日貨排訴運動」は、20 世紀に入ってから幾度となく発生している。それは次第に特定の産業についてではなく、「対日経済絶交」という形の運動になっており、日本製品のボイコットだけではなく、日本との経済・社会関係を断絶せよという運動に激化した。これについて猪木武徳は、次のように「反日」に到る当時の経済社会状況を分析している（猪木 2004: 128-129）。

……こうした反日思想は、学生をはじめとする急進分子のナショナリズムと結びついた。「日本人の考えるアジアの繁栄は、アジアの民衆の犠牲における日本の繁栄のことだ」と信じる者が多くなったのである。中国人の懐くこの反日感情を十分察知することなく、「反日」を西洋による工業化に対抗する日本・中国の伝統という図式で対応しようとした。……中国人の急進分子は、日系在華紡に対するような増悪の念を、イギリス資本の紡績会社に対して懐いていたのだろうか。平均資本水準をみると、日系企業や中国系よりも、実にイギリス系の方が賃金は低い……イギリス人の商法は、……「買弁」の利用に見られるように、中国の社会慣行を「受け入れる」ことによって中国社会に「受け入れられる」という側面を持っていた。……〔下線強調引用者〕

これまで引用してきた谷崎や『犯罪科学』などに登場する著者たちが、「反日感情」を十分分析しきれず、「西洋」対「日本・中国」という図式の中で思考しがちであったことはすでに見てきた通りであるが、これはある意味で近代日本の「オリエンタリズム」が、イギリス人商法のもっているような、「買弁」を利用し中国社会の慣行をよく調査しそれを活用

するという手法をとるまでに到っていなかった結果なのだともいえよう。

それは警察権力の使い方にもよく現れていた。雅川はさらに続けて次のように記している (雅川 1931: 276-277)。

……上海は獵奇の都といふよりは警察の都といふ方がより適切である。賣笑婦の數よりも、深夜に警戒してゐる警官の數の方が、日本人である私には遥かに脅威を感じずる。……仏租界については知らぬ。が、共同租界地で良民に生命の危険は斷じてない。獵奇の傳説は屢この種の危険について日本にゐる頃の私を脅かしたものが、佛蘭西租界は魔の世界だ。これについては私は何も知らない。もし上海に眞に獵奇の世界があるとすれば、佛蘭西租界に違ひない。このブルジョアの雰圍氣につつまれた中で、彼等が企てゝゐることは容易に窺知できない。……しかしこれは必ずしも上海に限つたことでない。日本でも、ブルジョアの獵奇は窺知能はぬ。前述の如く、私達が獵奇などとしやらくさい言葉で指す所は、たかゞカフェやダンスホールや安待合のことでしかない。上海が多少一般的に自由な世界であつたにしても、共同租界地で私が望見し得たものは甚だ他愛のない獵奇に過ぎぬ。このことは上海の土地に獵奇の文字を冠せることが小便くさい仕儀だといふ反面に、ブルジョアの世界は常に獵奇に満ちていて、これも亦上海のみに限らぬといふことを意味してゐる。だから私は由来獵奇などといふ言葉が氣に食はぬ。……話が少しそれたが、この佛租界は、佛蘭西の持つ自由性によつて、この租界の繁榮の爲には多少の罪惡は許容し黙認する。いや、そればかりではない。例えば朝鮮獨立の假政府や、共産黨策動が、この土地の上で行はれてゐることが明かに探知されながら、日本官憲ですら容易に踏み込む譯には行かないのだ。下手をすると、佛國官憲が逆に彼等を擁護する態度にすら出るといふ。私

の知っている領事館員は、こういつて一寸愛國的な慨嘆をした (下線強調引用者)。

こうした租界における警察権力の確立自体、巧みに構築された植民地支配の機能なのであるが、日本は欧米帝国主義列強のように対外侵略を展開することへの明確な自覚(「野蛮を文明化する使命」等)に乏しかったため、そのシステムが複雑なオリエンタリズムの言説支配によって組み立てられていることを十分理解できず、結果的に他の帝国主義諸国を出し抜くカタチで、単独で軍事力を投入するといった事態を生じさせたのであった。

これに関連して、1932年の上海事変直後の『犯罪公論』において、服部之聡は次のように分析している (服部 1932: 46-50)。

……盛場といつては洋梁(溇)濱附近があつたが、きわめて清教徒的なもので、犯罪の都、エロとグロの街などといった空氣は租界のどこにも芽生えてはゐなかつた。……模範租界に清教徒的氣分があり、いつさいの罪惡は城内支那人に任せたとでも云つた顔で、開拓者たちの手にする大概の記録は當年の牧歌的な上海をまづはいい氣持ちで吹聴することができたものだ。……さうした富豪支那人のために洋梁(溇)濱一帯が提供されたが、そのうち租界のあらゆる方面に色々な種類の支那人が流れ込んで、盜賊、博徒、賣春婦といった手合が横行したから、特殊の租界警察權がそれを機會に發生したのである。……これ〔租界〕はけして單なる治體(自治體)としての統一ではなかつた。——第一、自治警察行政權といふやうなものは普通の自治體には見られないものだが、しかもこれが國外列強の支配下に置かれてゐる、それとはいへどの一國のものでなく一個のインタナショナルな國實で一八六三年になつて——このときも決してあたりまへにはなく、長髮賊

討伐のどさくさに乗じて——英米租界が合併して今日の共同租界をつくり、自治軍をもつ権能を獲得した点を見れば一層明らかであらう。だが、法理論上からいへばどんなに七面倒な理窟となるものであらうとも、本質についてみれば、支那侵略の第一段に於ける資本主義列強協働部面の所産であり、半植民地支那に対する×××××の申し子であるにすぎない。

こうした警察権力の確立と維持は、欧米帝国主義列強の植民地支配の根幹を構成していた。そこは当然勢力均衡によって維持調整される国際政治の具体的な舞台でもあった。その意味で、各国帝国主義の状況に応じてシャンハイのイメージはさまざまに異なっており、フランス官憲が日本の帝国主義的拡張によって自国の国益が侵されることに対処するため日本の植民地内における独立運動勢力を「擁護」するのにもごくありふれた風景であった。

その場合、日本帝国主義の立場は複雑なものとなる。シャンハイを「支配の対象」として置き換えつつ、自身を「欧米列強と対抗して東洋を守るのはわれわれだ」といった倒錯した「自己イメージ」を構築せざるをえなかったからである。そこから、横光の『上海』に登場するような、「日本の軍国主義こそ、東洋の白禍を救いあげている唯一の武器ではないか。その他に何かがある。支那を見よ、印度を見よ、シヤムを見よ、ペルシャを見よ、日本の軍国主義を認めると云うことは、これは東洋の公理である」（横光 2002: 73）、といった「東洋と西洋の相克という図式の中での日本のミリタリズムの役割」を強く意識するアジア主義者が生まれたのであり、また、「ただ僕はマルキストのように、自分を世界の一員だと思ふことが出来ないだけの日本人です。あ

なたたちマルキストは、西洋と東洋との文化の速度を、同じだと思ってらっしゃるようにお見受けするんですが、僕はそこの誤謬から、ただ秀れた犠牲者を出すことだけが唯一の生産のように思われるんです」（横光 2002: 111）といった彷徨える近代日本の「大衆」サラリーマンが、「シャンハイを滑走する」ことになったのである。

むすびに

以上、主に『犯罪公論』と『犯罪科学』とを中心に、1930年代前後の日本におけるシャンハイ・イメージが、どのように活字メディアで描かれてきたのかについて具体的な記事を検討してきた。

ここで、本稿が引き出しておきたい結論は、両誌には、近代日本に新たに登場してきた「大衆」により消費される「イメージ」としてのシャンハイが、端的に反映されているということである。それは、「大衆」登場以前のイメージの生産と消費とは本質的に異なる現象である。なぜなら、支配する対象としてのシャンハイ・イメージが構築されていく過程そのものだからである。イメージが「大衆化」して自己増殖していったという事実は、いわゆる、戦時体制＝日本型ファシズムにおける大衆メディアの役割の重大性がシャンハイ・イメージ形成にも大きく関係していたことを端的に示している。

その場合、両誌編集者が意識していた「大衆」は単純な数量的概念ではなく、当時日本の社会現象として現われて来た「現象」であり、その観点から両誌を「大衆」雑誌として捉えることができるという点が重要である。編輯後記などの検討を通じて、明確にこの両

誌の編集者が読者層として新たなる「大衆」を想定していたことは明らかであった。周知のように、同時代のヨーロッパにおいても政治的概念として登場している「大衆」は、けっして愚鈍ではなく、上層階層にも下層階層にも存在し、その全体は「無名」であって「新しい慣習」のような「心理的事実」に他ならない¹⁸。そのような「心理的事実」としての「大衆」が、シャンハイをいかにイメージするのか。本稿では、その一端を明らかにした。

注

- 1 本稿は、2005年3月名古屋大学大学院国際開発研究科に提出された修士論文(『近代日本におけるシャンハイ・イメージ—1930年前後大衆雑誌の表象する〈他者〉—』)の「Ⅲ.『犯罪科学』と『犯罪公論』—1930年前後日本におけるシャンハイ・イメージ事例検証—」を基本的素材として再構成したものである。本稿中、より詳しく論証を必要としている部分について、字数の関係で十分な展開ができないでいる箇所もいくつか存在するが、その場合すでに論証を試みている同修士論文(徐2005)を参照されたい。
- 2 『東京朝日新聞』昭和6年1月31日付の「雑誌博覧會」の広告における取扱雑誌一覧には『犯罪科学』も挙げられている(永嶺2001: 59)。
- 3 「相互書園」とは、サラリーマンと官吏を中心とする新中間層を会員とする組織的私設移動図書館で、「新刊図書配達貸本業とでも言うべき商業ベースの読書装置」(永嶺2001: 228)。
- 4 以後、本稿では「上海」「Shanghai」の多義性を保持するために「シャンハイ」と表記する。
- 5 牧逸馬、林不忘、谷譲次の三つのペンネームを使い分けた、大正、昭和期の小説家。履歴や業績の詳細は谷(1972)参照。
- 6 劉建輝『魔都上海日本知識人の「近代」体験』(劉2000)の「第五章 魔都に耽溺した大正作家たちの谷崎と芥川—ツーリズムと大正作家—」では、谷崎については「上海に一戸を構えてもいい」という節小見出しを付けるなどしながら、芥川は上海が「嫌い」、その一方で谷崎は上海が「好き」といった比較対照的に両者を描こうとする章である。ところが、劉の引用し

ている、谷崎潤一郎「上海見聞録」『文芸春秋』1926年(大正15年5月号)を詳細に調べた所、実際の原文は、「……氣に入ったらば上海に一戸を構えてもいいくらゐに思つてゐた私は、大いに失望して歸つた」(谷崎1926a: 559)、とあるのだ。したがって、谷崎がそれ以前に上海に好感を持っていたかどうかは別にして、この一文では、国際政治経済情勢も反映して、ある意味ではもうすっかり上海を嫌いになってしまったということを書いているのであった。したがって、劉は谷崎の原文を正確に引用していないことになる。それは明らかにおかしな文脈で引かれている。なぜそのような引用の仕方を敢えてしたのか理由は分らない。谷崎のこの「憂心」については、(猪木2004)が実に合理的な説明を加えている。

- 7 1932年の第1次上海事変を経て1937年以降の日中戦争が激化していくと、「内地」の日本人にとっての上海の意味が変質し、またそれゆえに、「日本人」にとってあこがれの場所であると同時に「日本」を相対化する可能性に満ちた空間であった上海の特色は失われて、単なる「支配の対象」になってしまったことは、すでに多くの研究者が指摘しているところであるが、たとえば、劉建輝は、「明治以来、半世紀以上にもわたって演じられつづけてきた、日本の「内地」を相対化する場所としての上海は、およそその膨張する「内地」に抱き込まれた時点から、もはやこれまでのような「ロマン」の対象ではなく、おなじあこがれの地であっても、ほとんど一攫千金のきわめて現実な場と化してしまつたと思われる」(劉2000: 227)、としている。また、関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法進編著『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』(光和堂、1977年5月)に拠れば、雑誌『改造』もある程度定期的に中国特集を組んでいたもので、この変化を再検討してみたいと考えているが、他日を期したい。
- 8 新居格は「モダン・ガール、モダン・ボーイ(モガ、モボ)」などの新造語の生みの親としてもよく知られているが、より詳しくは、日本近代文学館編(1977)を参照。また、新居と中国との関わりについては、西村(2003)を参照。
- 9 内務省警保局編『昭和十年に於ける外事警察概況』は、アメリカ合衆国における左翼運動・共産主義運動について、かなりの紙数を割いて、次のようにアメリカからの宣伝活動の危険を警告している。「最近本邦に於ける共産主義運動

- 取締施設の充実完備並滿州国の成立其他国際情勢の変化等に鑑み浦塩上海等よりする本邦に対する赤化路線のみを以ては其の不利困難なることを覚知せるコミンテルンに於ては、近似米国方面より在米邦人共産主義者等を利用して本邦船員、各種労働団体、左翼新聞雑誌関係者其他に対し邦文共産主義宣伝印刷物を配布若は送付するの手段を採用し旺に同方面よりする赤化宣伝に活躍しつつあり」(『極秘 外事警察概況 第一巻 昭和一〇年』127頁:加藤2004に拠る)。これが報告されたのは1935年末であることを考え合わせると、1931年半ばの新居の「米国経由」云々の話は、当時誰もが知っていた話であるとは言い難いかもしれない。
- 10 1925年1月、前年に解党した日本共産党を再建する指示がコミンテルンから出され、そのための会議も上海で開かれた。
- 11 <http://www.ff.ij4u.or.jp/~katote/Homef.html> に拠る。
- 12 加藤は、このシャンハイを主な舞台としたコミンテルンの諸活動においてアメリカ共産党が果たした役割の重要性について、1935年夏、『反ファッショ統一戦線・人民戦線』を決議したコミンテルン第7回大会直後に、米国共産党書記長アール・ブラウダーがコミンテルン書記長G・ディミトロフに宛てた手紙(『ブラウダーからディミトロフへの手紙』1935年9月2日(旧ソ連秘密文書, RTSKHIDNI495-74-463, 邦訳『コミンテルンとアメリカ共産党』五月書房, 2000年, 106頁))を証拠として挙げながら論じ、さらに、「(1)ゾルゲ事件とも関係する「ゲアハルト」=ゲアハルト・アイスラー=米国共産党駐在コミンテルン代表(31年ヌーラン事件時のコミンテルン極東部上海ビューロー政治担当,ゾルゲと親しいドイツ共産黨員), (2)岡野進=野坂参三の米国での活動, (3)中国でのアグネス・スドレーの活動が、一つの手紙のなかの三つの主要論題として語られている」ことに着目している。また、その手紙には、アメリカ共産党の「上海の同志たち」が、「もし中国共産党と接触した場合にはその活動が危険に晒されるから、それを避けるために彼らに中国共産党と接触させない」といった指摘もある。
- 13 かつてサイドは、オリエントの人々を残酷性と結びつけて排除していく手法を、厳しく批判していた。「コロンビア大学の学生の手になる一九七五年度の課程ガイド・ブックには、アラビア語課程に関して、アラビア語の語彙の半分が暴力と関係があり、この言語に「反映」されたアラブ的精神はつねに誇大なものである」と書かれてあった。『ハーバーズ・マガジン』にのったエメット・ティレルの最近の論文はもっと中傷的で人種差別的なものであって、アラブは基本的に人殺しであり、暴力と詐欺はアラブ遺伝子によって伝えられるものだ、などと論じてあった」(サイド1986:293)。
- 14 永見徳太郎(1890.8.5~1950.10.23)は、長崎の郷土史家で豪商であり、また劇作家・南蛮美術研究家でもあった。著書に『南蛮長崎草』(春陽堂, 大15.12)などがある。
- 15 ちなみに、作家の宮本(中条)百合子は、谷崎のこの「にだって」を茶化した一文をその「長崎の印象」に記している(宮本1981:268-272)。もっとも、1926年当時の彼女にとっては、長崎からシャンハイへ出かけること自体には、あまり大きな意味がなかったようである。彼女にとって「シャンハイ」が別の意味をもつようになるのは、翌1927年12月ソ連に外遊し、滞在中の西欧旅行など経たのち、1930(昭和5)年11月に帰国してから日本プロレタリア作家同盟に加入するといった一連の出来事のことである。
- 16 本名は、成瀬家第11代成瀬正勝城主(1906~1973)。より詳しくは次のサイトを参照。
(<http://www.city.inuyama.aichi.jp/inuyama/kankou/inuyamajyo/jyousyu/jyousyu.html>)
- 17 谷崎は田漢と郭沫若に答えて『上海交遊記』で次のように述べている。「都會に富が集注して田舎が疲弊して行くのは、世界的の現象なので、支那に限ってはならないでせうと私が云ふ。それに外國の資本と云つても主に亜米利加と英吉利の金で、此れも世界中を席捲してゐる。さう云ふ經濟方面の事情は私にはよく分らないが、日本にしたつてアングロサクソンの金力に支配されてゐるだらう。つまり世界ぢゅうが、彼等にうまい汁を吸われてゐる譯で、苦しんでゐるのは支那ばかりではないかも知れない。まだしも支那は國土が廣く、ちつとやそつとの借金ではビクともしない富源があるだけ、外の國よりは優しかも知れない」(谷崎1926b:157)。
- 18 〈大衆〉概念をめぐる諸問題についてより詳しくは、徐(2005)を参照。

参考文献

- 『犯罪科学』創刊号～終刊号（1931年1月～1932年12月）〔臨時増刊号含め全31冊〕武俠社發行。
- 『犯罪公論』創刊号～終刊号（1931年10月～1932年12月）〔臨時増刊号含め全27冊〕四六書院發行（1932年11月号から文化公論社に發行元変更）。
- 猪木武徳. 2004. 『文芸にあらわれた日本の近代社会科学と文学のあいだ』有斐閣。
- オルテガ・イ・ガセット. 1969. 神吉敬三訳『大衆の反逆』白水社。
- 創刊号巻頭. 1930. 「二カ年完結の新雑誌」『犯罪科学』1 (1)。
- 川村湊. 1988. 「“シャンハイ”された都市—五つの「上海」物語」『文学界』42: 254-279.
- 加藤哲郎. 2004. 「イラク戦争から見たゾルゲ事件」日露歴史センター主催・ゾルゲ・尾崎秀実処刑60周年記念11/6講演会講演原稿 (<http://homepage3.nifty.com/katote/iraqsorge.html>).
- 小島晋治. 2002. 「日本人の中国観の変化—幕末、維新期を中心に—」『日中文化論集多様な角度からのアプローチ』勁草書房. 所収。
- 後藤朝太郎. 1931. 「逆光線に輝く上海の魔巷—上海の町ぐらい薄気味の悪い町と云うのはあるまい」『犯罪科学』2 (11): 162-185.
- サイド, エドワード・W. 1986. 今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社. (愛徳華・W・萨义徳. 1999. 『東方学』生活・讀書・新知三聯書店.)
- 徐青. 2005. 「近代日本におけるシャンハイ・イメージ—1930年前後大衆雑誌の表象する<他者>—」名古屋大学大学院・国際開発研究科修士論文。
- 日本近代文学館編. 1977. 『日本近代文学大事典』講談社。
- 谷譲次. 1973. (尾崎秀樹, 中島河太郎, 和田芳恵編集)『大衆文学大系 18 林不忘 牧逸馬 谷譲次集』講談社。
- 谷崎潤一郎. 1926a. 「上海見聞録」『文藝春秋』5. (再録: 1973. 『谷崎潤一郎全集第十卷』中央公論社. 本稿ではこちらに拠る.)
- 谷崎潤一郎. 1926b. 「上海交遊記」『女性』9 (5-6): 144-159, 145-153. 10 (2): 137-142. [復刻版1993. 日本図書センター.]
- 永見徳太郎. 1931. 「長崎島上海」『犯罪科学』2 (11): 260-271.
- 永嶺重敏. 2001. 『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール.
- . 1997. 『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール.
- 新居格. 1931. 「上海の散警」『犯罪科学』2 (11): 154-160.
- 西村正男. 2003. 「新居格と中国—あるアナキストにとっての「国境」」『徳島大学国語国文学』16: 48-24.
- 雅川滉. 1931. 「上海を滑走する」『犯罪科学』2 (11): 272-277.
- 宮本百合子. 1981. 「長崎の印象」『宮本百合子全集第十七卷』新日本出版社.
- 無署名. 1931. 「すべては芸術のために!」『犯罪科学』2 (11): 160.
- 服部之聡. 1932. 「上海はこうして出来た」『犯罪公論』2 (4): 40-52.
- 劉建輝. 2000. 『魔都上海日本知識人の「近代」体験』講談社.
- 横光利一. 2002 (1932). 『上海』岩波書店.